

資質・能力育成と「生き方・洞察力」

—「主体的・対話的で深い学び」、学びに向う人間性の涵養—

愛知教育大学教職大学院・佐藤洋一

一 はじめに—私たちは今、どこにいるのか？—

今、解のない複雑な予測できない現在と未来を生きるための教育の在り方が世界的規模で模索されている。こうした時期、教員自身が目の前の子ども達・保護者の願いを敬意を持ち正しく受け止め、不断に研鑽を積むこと、子ども達に指導・支援すべき「習得・活用・探究」（学校教育法・学力の三要素）や「学習過程の質的な改善」、「主体的・対話的で深い学び」「学びに向う人間性」等につながる教育を創造的に探究し、明らかにしていくことが求められている。

私自身の失敗や反省から、今も心掛けているのは「自分ができないことを本当には、教えることはできない（との覚悟が教師の専門家としての力量や見識、人間的想像力を高め育てる）」である。僭越な言い方だが、本編著がこうした一つのきっかけとなっていたら、ありがたいことである。本稿では「資質・能力」育成にシフトを変えた二一世紀（次世代）型教育への期待と展望、諸課題等への批評的視野も含め、私なりの問題提起、御提案の一端を述べる。

二 論理性（習得）を踏まえた「創造的で深い学び」へ（注1）

なぜ「子どもが楽しく、「生き方と洞察力」を育む授業」が求められるのか？なぜ「創造的でアクティブな」学びをつくる国語科授業と評価開発なのか？学びが創造性や洞察力にどのようにつながり、生き方の新たな再構築に向うことが必要なのか（傍線部は佐藤）。

1、キーワードとしての「価値の創造」「深い学び」

新学習指導要領「告示」に至る「審議のまとめ」や「答申」のなかでは「新たな価値の創造」「深い人間的な学び」に関する学びの過程

が重視されている。これ等は各教科等における学びの過程「習得・活用・探究」段階、伝統文化の尊重、討論や議論の評価力等と相互に関連させられながら強調されていることが大切な特色である。

例えば「国語科において育成を目指す資質・能力の整理」（「答申」資料二—一他）とも対応していることだが、「国語科における教育のイメージ」では幼児教育・小中高校における教育目標の②として一貫して「創造的・論理的思考」が以下のように重視されている。

創造的・論理的思考や感性・情緒を働かせて思考力や想像力を豊かにし、多様な他者や社会との関わり合いの中で、言葉で自分の思いや考えを深めることができるようにする。（高等学校②の場合、答申）傍線は佐藤、以下同じ。これは別の記述では、

「深い学び」の実現に向けて（略）、子供自身が（略）創造的・論理的思考の側面、感性・情緒の側面、他者とのコミュニケーションの側面からどのように捉えたのか問い直して、理解し直したり表現し直したりしながら思いや考えを深めることが重要」（同）

「学習・指導の改善充実や教育環境の充実等」とされている。さらに、「未知の状況にも対応できる『思考力・判断力・表現力等』の育成（理解していること・できることをどう使うか）の項目では、問題発見・解決につなげていく過程」「適切に伝え合い（略）集団としての考えを形成したりしていく過程」とともに「思いや考えを基に構想し、意味や価値を創造していく過程」が重視されている（同）。

各教科等の学び、「思いや意味」という価値の創造、「深い学び」との関連では、以下のような記述がみられる。

各教科等で習得した概念や考え方を活用した「見方・考え方」を働かせ、問いを見いだして解決したり、自己の考えを形成し表したり、思いを基に構想、創造したりすることに向かう「深い学び」を実現できているか」「同、まとめのポイント」（七頁）。

子供たちは、各教科等における習得・活用・探究という学びの過程の中で、各教科等で習得した概念（知識）や考え方を活用しながら、（略）自己の考えを形成し表したり、思いを基に意味や価

値を創造したりすることに向かう。「まとめ」(三〇頁)。

さらに、今回の改訂が目指すことは「子供の学びの過程を質的に高めていくこと」「質の高い学びを目指す中で(略)、着実な習得の学習が展開されてこそ、主体的・能動的な活用・探究の学習を展開することができる」(同 四七頁)とも述べられている。

2、創造性・論理性を明確にした授業と評価構想

(1) クリエイティブな思考・判断・表現力

第四次産業革命・グローバル社会が進行する現代、多様で膨大な「情報」から価値ある情報を選択し、知識や経験・感情(立場や専門性)との関連性から統合・構造化、既有的知識・技能等の構造転換等を通し、新たな意味・価値を持つ「自分の考え」を形成する学びの方略・情報リテラシー(いわゆる創造的思考・判断・表現力)を系統的に指導していく必要がある。解のない、複雑多様な価値観や情報の時代をたくましく生き抜くために不可欠な資質・能力の重要なキーワードとして、「創造性(論理性)・深い学び」が位置付けられていると読むことができる。

ただ、こうした創造的思考・提案は高度な批評性や判断力(洞察力、感受性等も含む)、発想の個性等の組み合わせであるため、その前提(基礎・基本)となる論理的な思考・判断・表現力を育成する必要があるので。「審議のまとめ」には、創造性と論理性の相違と重なり、習得・活用・探究段階と発達段階、各教科等の学びとの関係・評価ポイント(ループリック、パフォーマンス評価)等の記載は十分ではないように私には思われた。「判断力・表現力」とのセットでこそ、「思考力」の在り方と評価を提案する必要がある。

(2) 論理(習得)を踏まえた創造(活用・探究)

「答申」では「国語科における学習過程のイメージ、別添二―三」も提示されているが、今後は新学習指導要領の趣旨を正確に踏まえ授業改善に活かしていくために以下のような観点が必要である。

① 「習得・活用・探究」の過程や伝統文化の尊重と継承等(教育基本法・学校教育法他)を踏まえた「論理性(習得)を踏まえた

創造性(活用・探究)」の育成、新たな価値観や生き方の創造・提案をめざした授業構成、そのために必要な深い、本質的な洞察力(判断力・批評力)や提案する力としての表現力(多様なテキスト形式、議論やプレゼン力)、写真やグラフ等の非言語情報も含んだ情報リテラシーの明確化、系統的指導観・評価観等が必要。

② これからの学校教育で新たに重要となるのは全教科・領域や活動のベースに「学びに向かう力(主体性)、人間性等(深い学び)」があるということ。学習活動を通してどのように社会や世界と関わり、どう主体的によりよい人生を送るか等、子ども達の「生き方」や価値観の更新に直結する「深い人間的な学び」につなげる。

そのためには活動ありきの学習ではなく、教科内容の本質的で原理的な魅力を引き出す「学び方(見方・考え方)」、例えば伝記教材であれば対象となる人物の生き方とその価値を読み取り、深い人間性や英知等に気付かせる「学び方」を習得させ、評価していくことが必要。知識・技能の構造化(習得)、「思考力・判断力・表現力等」(活用)を踏まえ「質的に深い(人間的本質的)な学び」への指向性(「学びに向かう人間性等」)が明確に示されている。誤解を恐れずに申し上げればよりよい「生き方」「価値観」を創造できる国語科学習を段階的に構成する必要がある。

③ こうした「深い人間的な学び(創造性、批評性)」を的確に見取り評価し、学びを自覚しメタ認知化していくためのパフォーマンス課題・評価(論述、議論や討論、提案、批評・鑑賞、論証等)、具体的で本質的なループリック開発への新たな視点が不可欠。

『主体的な学び』の実現に向けて(略)、子供たちに身近な話題や現代の社会問題を取り上げたり自己の在り方生き方に関わる話題を設定したりすることなど(略)特に、学習を振り返る際、子供自身が自分の学びや変容を見取り自分の学びを自覚することができ、説明したり評価したりすることができるようになることが重要。「学習・指導の改善充実や教育環境の充実等」との指摘がある。国語科学習は資質・能力、知的活動・言語能力等、全

ての教科・領域・活動の基盤で中核となる教科。学習過程と振り返り(メタ認知化)における「主体的な学び」「学びに向かう力(人間性等)」はそれ等全てを一貫して貫くベースになっている。

そのため、論理的思考・判断・表現力を踏まえた「創造的・批評的な学び」、学び自体をメタ認知、評価・批評できる学習、全員に確かな習得・他者と協働的・対話的に関わるためのコミュニケーション能力、自己の在り方生き方に関わる価値観・感性を形成する「思考・判断・表現力等」の育成(活用)、そして学びの「質的評価観」の系統性の検証等への期待が明示されている。

3、選択「論理国語」「文学国語」「古典探究」(仮称)

小中学生が高校に進学し何をどう学ぶか。高校における共通必修科目「現代の国語」「言語文化」(仮称)と選択科目の大幅な教科・科目構成の見直し案は、資質・能力育成、幼児教育・小中学校カリキュラムの系統性や高校他教科との関連・汎用性、評価方法の在り方等の面でも非常に重要な意味があると思われる。

特に「論理国語」は、外国語科の新選択科目「論理・表現Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ(仮称)」(発表や討論・議論、交渉の場面を想定し、外国語による発信能力を高める科目群)との関係が大きく、かつての高校二年生における論理的思考力調査における課題克服の系統的な戦略も見ることが出来る(「特定の課題に関する調査(論理的思考)」「国研」)。

誌面の関係で、文章形式・構成論(情報・テキスト批評・評価)への記述についてのみ簡単に触れる。「国語科において育成を目指す資質・能力の整理(案)」では多様なテキスト形式に関することとして、「文章の種類に関する理解」(「知識・技能」の項目)「構成・表現形式を評価する力」(「思考力・判断力・表現力等」の項目)が明記されている。しかし、管見ではこれ等に関する系統的な指導観や評価観、理念等の言及はほとんど見られなかった。報告・鑑賞・評論・批評、随筆等は何がどう違うのか、何をどう書かせ評価すればいいのか。説得力ある調査報告やプレゼンテーション、深める質問…等の条件や評価基準(ルーブリック)は何か。今後はこうしたこ

とに授業改善レベルで具体的に応えていくことが必要である。「創造的で深い学び」等の高度で複雑なパフォーマンスをどう指導・支援するのか、ルーブリック評価・基準による授業改善・検証(公的説明・エビデンス)が求められるからである(「三」の4参照、注2)。

三 今後の教育を考える四つの枠組み・視点

1、多様な「フエイク(偽)ニュース」にどう向き合うか

研究者の端くれとして私自身への自戒を込めてだが、私達の日常は多くの「フエイク(偽)ニュース」、加工・変形・歪曲された情報、時には意図的な悪意と誹謗中傷を込めた情報：等に取りまかれていく。これ等は時に個人の判断や行動、生き方まで、さらに国家の命運まで(大統領選や政治的判断)を左右しかねない。私達は日々、様々な情報に翻弄され、試されていると言っている程である。

身近な経験から言っても、例えば論理的に話すがどこかおかしい信用できない方、海外の研究や文献の移入・翻訳や紹介(解説)に終始している研究者、これまでの自らの提案等の責任・反省無しに「これからは：です」と平気で語る立場ある方：。ネット配信記事、テレビ・新聞他のメディアだけでなく、私達教員や官僚、政治家、新聞記者の言葉等も挙げることができるだろう(注3)。

2、批評的に読む、価値ある問いを設定できる資質・能力を

数年前、ある国語教育・全国学会、私が司会の分科会で大学院生(修士課程)が「理論と実践(検証)の融合」というコンセプトで延々と研究文献や海外の理論書の要約と引用、紹介(解説)を行っている研究発表があった(指導教授の紹介した文献?)。明るく素直、性格の良さは感じる方なのだが質疑応答も全く要領を得ない、聞く力が未熟?なのか、質問の背景・聞かれていることが理解できず、噛み合わない返答、解説の繰り返し：、逆に心配した程である。

博士論文作成のための実績作り、学位を取得するための研究の途中経過を何度も学会発表するというのも品性に欠けるが、私が最も疑問だったのは先行研究としての文献選択の基準や根拠、分析や考

察が極めて表面的で（誤解を恐れずに言えば学閥と師弟関係の偏りが強い）「文献や資料（情報）を批評的に、多角的・多面的に読む」と言うこと、研究としての「価値ある問い、研究課題を設定する」という教育・科学研究のごく基礎・基本（習得）がよくみえないことだった。こういう方が将来、教育学部の教員になったら、きつと現場の切実な実践課題や先生方の御苦労への共感よりだれかがまとめた（自分で苦労して考えない）理論重視、海外の研究動向第一の移入・紹介（解説）の研究者になるのではないかと思われた。

こういう大学院生・大学生は決して特別ではない。指導教授の責任も重い。これからの小中・高校生、子ども達に必要な資質・能力は、知識・情報の蓄積、表面的な要約・引用、巧みに図表に整理されたプレゼンテーション能力等も重要だが、それよりも自分の判断や分析・考察の大切さ（洞察力の妥当性、本質性、価値判断力）、そして何がどう課題か、問いを立てることができる力（質問、課題発見、言語化）である。そのため批評的・情報リテラシーの系統的指導、評価観の育成は不可欠であると考えられる。

3、内容の質的価値（人間性に向かう学び）と言語能力育成

藤原正彦氏はやや極端な面もあるし（戦略的な文体）、提言を小中・高校等への教育実践、カリキュラム・マネジメント（教育課程研究と評価研究等）へどう具体化するか等には課題もあるだろう。

しかし、日本の教育の内実・質的意味の大切さと言う観点から、国語教育（言語教育）と伝統的言語文化、教養と見識の重要性を熱く語ってきている。次期学習指導要領をめぐる教育動向、いわゆるグローバル教育導入への警鐘、アクティブ・ラーニング重視の動向等についても批評的に述べている（以下、傍線は佐藤による）。

アメリカ等の欧米を見本にしたようなアクティブ・ラーニングの一つとして：「ディベートやディスカッションなら「多少なら取り入れてもよい」が、「肝腎なのは、いくらディベートやディスカッションを重ねても論理的に話すことに慣れるだけ」ということだ。堂々と論理的に話すことと内容の質とが無関係なのは、アメリカ人を見れば

わかる（大統領選挙や国際テストにみる子供達の成績の実情等）」「（流暢な英語、美しいパワーポイントでのプレゼンでの説明：であっても）「空疎な内容では物笑いの種である」」評価の対象となるのは内容であり、教養や見識である」。以下は最後の部分。

グローバル教育という皮相的なものが他の重要教科、とりわけ知的活動の基礎として初等教育で圧倒的に大切な国語の充実を妨げているし、今後さらに大きく妨げるだろう。ここ二十年の教育は、ゆとり教育、フィンランド式教育、グローバル教育と次々に他国の真似ばかりしている。この節操のなさ、自信のなさは何なのだろう。グローバル教育などにつつつを抜かしていると、日本中が中味のない口舌の徒ばかりとなる。（藤原正彦「グローバル教育の行き着く先」『週刊新潮二〇一七年三月九日号』新潮社）かつては「児童の側に立つ」国語学習、「単元を貫く言語活動」等といろいろ変わってきている。「審議のまとめ」「答申」段階から「告示」へ、その後、各教科調査官・視学官等による整理・啓発、その後、文科省や様々な有識者、学会関係者等の方による解説や解釈等によって「答申」「告示」の文言や趣旨が微妙に変わってきている歴史がこれまでもある。子ども達・保護者・地区への公的教育責任と言う面から考えると：「答申」「告示」等も正確に深く（背景も含め全体的・批評的に）読み解いておく必要があるのではないか。

4、「深い学び」を創ることとテキスト形式・学習過程

国語科で扱う教材には近現小説や詩歌、民話・伝承、古文・漢文・漢詩、評論・鑑賞・批評、科学読み物やエッセイ（随筆）、伝記・自伝（評伝）、記録・報告・報道、新聞、コマーシャル、伝統芸術や文化（狂言・落語）等のいわゆる多様な表現ジャンル・テキストがある。高校国語科では、これらの学習の延長線上にさらに高度な選択科目「論理国語」「文学国語」、外国語科では「論理・表現Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」、「理数探究」「地理探究」等の新科目が設置される。ともに教科の本質的意義を踏まえ、創造的思考力や表現力、洞察力等の資質・能力育成に関する系統性を、ここにもみることができると。

小中・高校国語科では、一貫して「思考力・判断力・表現力等」「創造的・論理的」言語力を高めるために「構成・表現形式を評価する力」や「考えを形成し深める力」が重視されている。私見では、特に「構成・表現形式を評価する力」は多様なテキスト（ジャンル）の構成・表現形式の評価（判断）、活用、メタ認知能力育成等に関する重要な指摘であり、論理的で批評的・創造的な言語力育成にも深く関ることである。例えば、具体的には、目的・役割・機能に応じた様々な文章形式・テキスト（内容と形式、方法と価値等）を読み解き批評・評価する力、より効果的に説得力をもって書いたり表現・伝達、分析・評価していく力の育成のことである。

さらに「構成・表現形式を評価する力」「考えを形成し深める力」の重視は、授業場面で「思考力・判断力・表現力等」のなかでも「表現力」の質的価値、深さや本質性、評価観等が問われることになる。「判断力（洞察力）」の在り方と結びついたパフォーマンス課題（評価）、その指導・評価観、ルーブリックの在り方、妥当性等も問われる。例えば論述・プレゼンテーションや質疑応答、討論や議論を深める力・評価する力、仲間と効果的に協働する力、新たな価値の創造や提案性、実践と参画等をどのような基準（ルーブリック）で何を、どう評価し子供たちにどう返すのか。これ等は学習過程の改善・構造化、カリキュラム・マネジメントにもかかわってくる（注4）。

五 「学習過程」の質的改善から実践を見直す六観点―（注5）

1、学びの過程と学習過程・単元構造化とのズレ？

新学習指導要領では各教科とも子ども達の認知過程等（学びの過程）が重視されている。主体的・探究的に課題を発見・解決していく資質・能力育成のため、改めて認知科学や学習科学の最新の成果、批判的思考や問題解決研究等の思考・認知過程のステップが取り入れられ強調されている。ただ、これ等は授業方法論としての学習過程論と重なりはあるがそのまま各教科・授業における学習過程論とイコールにはならないことが多い。授業や単元の目的・段階や教科

の特性、目指す学びの効果等を十分に考慮する必要がある。

2、学びにおけるメタ認知―振り返り・まとめ、見通し他―

学びにおけるメタ認知の重要性、その具体化（解明と実践。検証）の必要性は「答申」でも言及されている。子ども達に何をどのレベルで、いつ、どう振り返らせるのか、まとめとの違い、学習過程へお位置づけの在り方等が課題となる。これは学習過程の質的改善を検証・改善する視点の開発でもある（教員・子供たちのメタ認知）。

3、教科の本質的意義（本質的な問い）と汎用的スキル

これからの資質・能力を育成する汎用的スキルの例としては、既に「答申」段階でも「言語能力」「情報活用能力」の他、「見通し振り返る力」「問題発見・解決能力」、統計的なデータの分析・判断力、クリティカル・シンキング等が示されている。

ただ、これ等と各教科の本質・特性との関係、さらに汎用的スキルが人間的な学び（深い学び・人間性）とどこがどのようにつながっていくのか、どのように指導・支援、評価を組み立てていけばいいのか等は、今後の実践事例を通じた解明と検証によることである。

4、教員の指導性、役割と位置―習得・活用・探究と主体性―

「主体的・対話的で深い学び」の三要素の相互関係、循環性等がわかりにくいため、これ等の構造を学習過程・単元構想論、授業の重点化論等として論じられ提案されることが多い。

こうした御提言で欠落していることが多い点が「習得・活用・探究」の位置づけである。「答申」でも敢えて「活動あって学びなし」に陥らないための「習得」段階の重視、教員の創意工夫や不断の見直しを指摘されている。改めて子どもの学びの主体性や対話性、深さを育てる教員の指導性、役割と位置が問われている。

5、「深い学び」とパフォーマンス評価・ルーブリック

深く、多面的・多角的な学び、学びに向う力・人間性等、活用・探究型資質・能力、主体的な課題解決能力、その人らしい発想や創造性・批評性、論述やパフォーマンス課題への対応力等を評価する時の評価方法、ルーブリックの開発、その基準や段階、在り方：そ

の妥当性や本質性等の提案・実践と検証が必要不可欠である(注6)。

6、全教科の中核としての言語能力と言語活動の新たな充実

資質・能力育成の観点、また教科の本質(学びの深さ)を踏まえた「汎用的スキル」育成の観点等から「読む・書く・話す聞く(討論や議論、プレゼンテーション等)の国語科言語活動、伝統的な言語文化・言葉の諸機能等を「学習過程」にどう位置付けるのがより妥当で効果的かが実践課題の一つとなる。特に、汎用的スキルの明確化とともに、日本の高校生の弱さと指摘されてきた(小中学生、大学生も同様とみることが出来る)論理的思考力や話し合い・議論の評価や洞察力、考察と批評、創造的な改善、メタ認知等も今後の言語活動のポイントとして授業化していく必要がある。

おわりに―「資質・能力」育成をめぐる教育的動向―

本原稿での論点や私見の背景、資質・能力育成をめぐる教育動向として、一つには新学習指導要領「告示」(文科省)と新教科書作成、実践化・評価開発等があるが、他には以下のようなものがある、1、第三期教育振興基本計画や第四次産業革命等(シンギュラリティ二〇四五年問題)、2、二〇三〇年代の資質・能力と教育の枠組みを模索する「OECD二〇三〇」(文科省とOECD、東京学芸大学・東京大学)、3、「次世代教員研修センター」の設置、養成・採用・研修の大きな枠組み、在り方の再構築等である(詳細は略)。

注記

1、「二」は、佐藤洋一『深い学び』を表現する創造的・論理的思考力を育てる学習・指導の充実(『教育学科学国語教育二〇一六年一二月号』明治図書)を本稿の趣旨に即して改稿したものである。2、テキスト形式論については継続的に提案してきた。佐藤洋一「多様なテキスト(情報)の「構成・表現形式」・評価―求められる資質・能力と創造的・論理的思考・三つの側面、多様なテキスト形式―」第一三〇回全国国語教育学会東京大会(二〇一六年)、

同「二一世紀型授業開発と国語科『活用型テキスト形式』」第一二八回同学会兵庫大会(二〇一五年)同「批評的・創造的な学びの授業開発」第一二七回同学会筑波大会(二〇一四年)等。

3、「フェイク(偽)ニュース」とはアメリカ大統領選挙前後から聞かれる言葉で「正しく知る」ことへの危機的な状況を示す言葉でもある。真偽を判断する手間を惜しむ風潮、デマが拡散しやすい現代状況の一端。日本を代表するIT企業・DeNAサイトが閲覧数と広告収入増大のため、専門家の監修もない医療系サイトを運営、著作権侵害の可能性がある膨大な記事を掲載していた。

4・6、佐藤洋一・森和久・有田弘樹「国語科におけるアクティブラーニングの開発と課題―質の高い深い学び―」につなげる活用型テキスト―『愛知教育大学教職キャリアセンター紀要一号』(二〇一六年)、佐藤洋一・左近妙子『深い人間的な学び』を創造

する伝記教材の授業―『杉原千畝』(開発教材)と向き合う小学六年生―『愛知教育大学研究紀要 第六六輯』(二〇一七年三月)、佐藤洋一・有田弘樹『創造的・論理的思考』を鍛える二一世紀型教育―「故郷」(小説教材・中学三年)におけるパフォーマンス評価・メタ認知―『愛知教育大学教職キャリアセンター紀要 第二号』(二〇一七年三月年)等。

5、佐藤洋一「資質・能力を育む『学習過程』(中学校)」「国語科・学習指導要領の改訂のポイント」(明治図書、二〇一七年四月)。
主要な参考文献(一部)

佐藤洋一「これからの学び・教育の何を、どう創るのか」『二一世紀型教育研究―新しい学びを創る(創刊号)―』(二一世紀型教育研究会編著二〇一六年五月)。西岡加名恵他編『新しい教育評価入門』有斐閣(二〇一五年)、アンジェラ・ダックワース著(神崎朗子訳)『GRIITやり抜く力』ダイヤモンド社(二〇一六年)、経済協力開発機構編著(国立教育政策研究所監訳)『PIISA二〇一五調査 評価の枠組み』明石書店(二〇一六年)等。